

2014年度近未来チャレンジ論文特集 「未来に向けたチャレンジ」にあたって

阿部 明典

(千葉大学)

近未来チャレンジも、始まってからすでに15年を超している。その間にさまざまなチャレンジが卒業した。卒業の後、実用に向けたり、研究会などを立ち上げて継続するなど、卒業が終わりではないのである。また、原則5年以内に実現できるということになっているが、その前に実現できてしまえば、そこで卒業できるし、チャレンジャーの判断で1年なり延期をすることもできる。難しいチャレンジだけに、思ったように進まないこともある。しかし、まずは宣言することを達成するのが重要である。そのためには、たとえ1年伸びてもよいのではないかと思う。さすがにそれが10年であつたりすると、近未来とはいえないので、問題があるが、

さて、今回は、以下の論文が本稿の執筆時点までに採択された。

- 三浦麻子, 鳥海不二夫, 小森政嗣, 松村真宏, 平石界: ソーシャルメディアにおける災害情報の伝播と感情: 東日本大震災に際する事例
- 北村侑也, 高間康史, 梶並知記: グルーピング操作に基づく対制約一括生成手法

三浦らの論文は、2011年の災害のような事態においても、コミュニケーション、特に、転送による情報共有などができるようにするためのチャレンジである。本論文では、ソーシャルメディアにおいて、Tweetに含まれる感情語に注目し、分析している論文である。この知見により、注目すべきTweetを抽出できるようになると思われる。

北村らの論文は、砂山により提案されているTETDM (Total Environment for Text Data Mining) を用いることによる制約付きクラスタリングを採用したインタラクティブクラスタリングシステムの提案である。TETDM

自体、さまざまなアプリケーションで利用可能であるようにライブラリのような形で提案・実装されている。提案されているのは、そこを用いて、インタラクティブクラスタリングが容易にできるようになるシステムである。

これらを見ると、チャレンジに参加した人の技術により、チャレンジが着々と進んでいることが見て取れる。

今号に掲載されている論文の数がやや少ないように見えるが、実は、まだ、査読プロセスにある論文もある。次号にはそれらの中から数本掲載されるのではないかとと思われる。査読プロセスの遅れに関して、担当として申し訳ないと感じている。近未来チャレンジは最初は、オーガナイザだけの投稿であつたが、ある年から参加者の投稿も追加した。オーガナイザの研究だけでなくそこに参加している研究も見ることができるのは、非常に好ましいことである。どのような研究が加わってチャレンジが進展しているかわかる。さらに、欠けている研究も見つかり、新規の参加もあるかもしれない。その一方で、査読者探しに苦勞をしている。つまり、同じチームの人には査読を頼めないし、近未来チャレンジ自体が基本的に新しい領域なので、そのチーム以外には、なかなかその研究を行っている人が見つからない。チームが大きくなること自体、そのチャレンジ研究が広く行われていることを示すので、非常に好ましくもあり、近未来チャレンジで考慮される項目にふさわしい。論文投稿の増加は、非常に好ましいことであるが、このような裏事情もあつたりする。言い訳めいたことを書いてしまったが、コレが現状である。

いずれにせよ、近未来チャレンジは、単にチャレンジ卒業だけではない。卒業できた後が重要なのである。どの方向に進めるかは、卒業の時点で決められると思うが、どの方向に進むにせよ、未来のAIを担う研究になることを期待している。